

Yanow, D. and P. Schwartz-Shea (2014) "Wherefore "Interpretive" An introduction", in Yanow, D. and P. Schwartz-Shea (2014) *Interpretation and Method: Empirical Research Methods and the Interpretive Turn*. Armonk, NY and London, M.E. Sharp. pp.xiii-xxxi.

Yanow, D. and P. Schwartz-Shea (2014) 「どのような理由で『解釈的』なのか」 pp. xiii-xxxi.

➤ 紹介文

本稿は、解釈的手法並びにその哲学的基礎を専門とする Dvora Yanow と、政治学を専門とする Peregrine Schwartz-Shea の編著による、*Interpretation and Method: Empirical Research Methods and the Interpretive Turn* 第2版の冒頭に収められた論文である(初版：2006年)。序章にあたる当該論文は、本著全体の検討課題とともに解釈的アプローチの定義や特徴、その多様性について図表とともに検討を行っている。

➤ 概要

- 自然科学、物理学、社会科学など、あらゆる分野における研究者がデータを「解釈」している。ただし、この「解釈」という言葉は、社会科学における「解釈的転回」と、研究課題の学際性・横断性の高まりという二つの動向を背景に、社会科学に関する方法論の議論において、重要な位置を占めるに至った。
- なぜ一連の研究や手法を「解釈的」と呼ぶのか？ 解釈的手法のどこが「解釈的」なのか？ 本書では全体の検討を通して、上記の疑問に答えたい。
- 序章にあたる本稿では、まず「解釈」を主題とする研究潮流への関心の高まりを確認する。次に、「解釈的アプローチ」の定義と特徴について、「定性的」並びに「定量的」に代表される研究区分との対応から明らかにする。最後に、その手法の多様性を一覧表とともに示し考察を行う。

➤ 社会科学における「解釈的転回」(xiii-xv)

- 19世紀末から20世紀初頭にかけての大陸哲学の研究が英訳されるようになると、それらの思想は、20世紀後半、特に米国の著作において、社会科学における「解釈的転回」あるいは「解釈的パラダイム」として広く知られるようになった(Burrell and

Morgan 1979; Hiley, Bohman and Shusterman 1991; Rabinow and Sullivan 1979, 1985)

- ・ 主に「言語を真剣に考慮する」という方向性や、人間による意味づけ並びに思想的な申し立てへの関心を共有する「解釈的パラダイム」は、言語論的転回(例: Rorty 1967; VanMaanen 1995)、修辞学的転回(例: McCloskey 1985)、物語的転回(Stone 1979 参照)、歴史的転回(McDonald 1996)、隠喩的転回(Lorenz 1998)、論争的転回(Fischer and Forester 1993)、文化的転回(Bonnell and Hunt 1999)、実践的転回(Schatzki, Cetina and Savigny 2001)等と表現された¹。
 - 本書全体で議論される、「解釈的(interpretive)」と呼ばれる方法論・哲学は、実証主義並びにそれを哲学的基礎とする定量的手法との論争の中で大きく発展した。
 - 先行研究では、「解釈的(interpretive)」という言葉や、「経験的研究とは関連が薄い、主に意味の問題や解釈学に関する社会科学の一種」として定義している(Ragin 1987: 3)。
 - ・ 上記の見解に対して、著者らは「経験的研究と密接に関わる、解釈学的あるいはその他の方法で分析される意味の問題(problems of meaning)に関わる研究」として「解釈的」研究を位置付ける。敷衍すると、本書では「多くの経験的社会科学の主題は、意味の問題であるべきだ」と主張する。
 - 本書全体の目的は、(1)「解釈」に関する哲学的・概念的・理論的転回が経験的な研究実践に与える影響について、存在論的・認識論的前提に関連づけつつ検討すること、(2) 解釈的手法の多様性を明らかにし、それらがどのような考慮並びに分析の手続きを伴うかを明示することにある。
- **方法を明示する必要(xv-xvii)**
- 解釈的手法を用いる研究者の多くは、その方法論的思考、選択、決定について明確な考察を行うことなく、ただ作業を行い、物語を書くことに終始している。
 - ・ 例えば、歴史家は歴史を描き、組織学の理論家はマネジメントに関する問題を分析し、政策アナリストは政策を分析する。このことは研究者が、確証作業(evidentially proceedings)の慣習が確立している研究コミュニティに向けて執筆

¹近年の政治学においても、比較政治学、比較政治経済学、国際関係論、政治社会学等の分野において、言説や規範といった要素に着目した研究が増加している。こうした非物質的要素に着目した新たな手法の登場は、「観念主義的転回」並びに「構成主義的転回」として呼称されている(西岡 2011: 98 頁)。

する場合、極めて理にかなった作業と言える。

- しかし、学問分野間の障壁が取り払われつつあることを背景にして、研究者と同じ前提や仮定を必ずしも共有しない研究コミュニティ・読者に向けて、著者自身が依拠する方法論とその手続きについて明示的に述べる必要が生じている。
 - 具体的には 1970 年代以降の行動主義の影響拡大に伴う、より専門的な統計手法の活用と、学際的研究の増加によって、上記した方法論的な透明性を明確にする必要が高まってきた²。しかし、解釈的手法の体系的説明や哲学的土台との関連付けが欠如していたことを背景に、解釈的手法は厳密な学問ではない(not serious scholarship)という誤った印象が他の分野の研究者に与えられている。
 - 上記の問題を鑑み、本書では「研究方法」の特定の用語に関する既存の前提を問題視した。具体的には、科学と科学的推論 (Mary Hawkesworth、第 2 章)、説明と因果関係 (Robert Adcock、第 5 章)、厳密性 (Dvora Yanow、第 6 章)、一般性、妥当性、信頼性 (Peregrine Schwartz-Shea 7 章) の概念について各章で探求した。このような、解釈的研究と実証主義的研究において共有された概念とその齟齬を指摘することで、概念の使用に重大な注意を払う必要があることを示唆した。

➤ 定性的(Qualitative)の何が問題なのか (xvii-xxi)

本節では解釈的手法・研究の特徴について、主に「定性的(Qualitative)」という研究区分との対比から検討を行う。

- KKV の主張した、「自然科学によって掲げられ、経済学や心理学によって支持されている科学の基準」に代表される議論(社会科学における共通の基準)を背景に、「定性的研究」の分野は、大規模「n」研究(定量的研究)の要求を順守するようなプレッシャーを受けている。
 - こうしたプレッシャーの中で、「定性的研究」と呼ばれる手法は、定量的研究が前提とする哲学的基礎に基づく研究手法とそれとは異なる哲学的前提を有する研究が混在している状況にある。
 - ◇ 例えば大学教員の募集要項を見ると、「定性的研究」とは、エスノグラフィー、

² 「行動主義」とは、社会科学に対し自然科学的な方法論を適用した分析手法を意味する。すなわち、「分析の対象となる社会現象を、それを引き起こしている最小の単位である個人にまで還元し、その個人の過去の行動、意思決定、態度形成などのパターンを分析することで、社会現象の一般的な法則を発見しようとする」手法である(田中 2003: 386 頁)。この手法は、20 世紀半ばの心理学分野において「行動科学主義」として確立した。その後、諸学問分野への波及と同時期の大衆デモクラシーの進展を背景に、政治学研究では有権者の意識や行動を対象とした、行動主義に基づく計量分析が普及した(同上)。

参与観察、エスノメソドロジー、記号論、ナラティブ等のアプローチではなく、フォーカスグループ、構造化インタビュー、その他の類似手法を用いた研究を指すことが多くなっている。

- 本稿では、非統計的手法、すなわちフィールドに基づく観察やインタビューなどを用いた「小規模 n」研究を「定性的」研究として位置付ける。「定性的」研究とは、20世紀初頭から半ばにかけての、人類学部門でのエスノグラフィーや社会学部門での参与観察に代表される、シカゴ学派的フィールドワークの特徴を備える研究であり、両者の手法が政治、組織、教育等の研究へと拡張されたものである。
 - ・ 上記の研究は、しばしば「伝統的」な定性的研究と考えられている。これらの研究では以下の三種類のデータを分析し、それらによって伝達される意味を推論する。具体的には、言語（行為者による発話、組織や政府関係文書、個人の日記における記述等）、行為と相互作用（身振りや発声などの非言語的コミュニケーション要素等）、上記の行為で使用され、言語で言及された物理的条件や事象（政府の建造物、国勢調査のアンケート、絵画、組織の理念等）である。
 - ・ またこれらの研究では、以下の三つの研究上の手続きが重視されている。
 - ◇ 言語に基づくデータ生成の研究様式：時間をかけて行なった観察により、研究者は研究対象領域の言語、価値、信念、その他の文化的側面に埋没する
 - ◇ 言語データを分析する言語ベースの研究様式
(統計分析のためにデータを数値に「変換」しない研究を指す)
 - ◇ データと研究上の知見を伝達するための詳細な叙述の様式
- 上記した「定性的研究」の特徴を踏まえ、本稿は「定量－定性」の二つの区分を、実証主義の哲学的前提に立脚した研究と、人間の意味づけに関心を寄せる研究との、認識論・存在論的な差異を表現する語彙として理解する。後者は「解釈的」という言葉で定義される。すなわち、二項対立的に言えば、「定量的－解釈的」な方法論が存在すると言える。以下では、解釈的アプローチの特徴を確認する。
 - ・ 解釈的アプローチ（「伝統的」な定性的研究手法）では、仮説を設定した上で研究を開始し、それをフィールドでの「現実」に対して「検証」することはしない。解釈的アプローチの研究者はいくつかの事前知識とともに、「アブダクション」の論理に基づく推論によって研究を開始する³ (Agar 2010; Locke, Golden-Biddle, and

³ 「アブダクション」とは、「仮説を形成する思考の方法を意味」する(米盛 2007: 1頁)。一般的に、「科学的論理的

Feldman 2008; Schwartz-Shea and Yanow 2012, 27-34; Maanen and Sørensen 2007)。

- ◇ 仮説推論的に(アブダクションに基づき)開発された理論は、因果関係や一般法則を予測する装置としてではなく、理解のための潜在的な資源(a potential resource for understanding)として、特定の研究の文脈において評価される。
- ・ 解釈的アプローチは、解釈アプローチの哲学的前提に基づき、妥当性と信頼性に関する独自の評価基準を有している(本書第7章を参照)。
 - ◇ KKV が、小規模「n」研究を改善するために観察回数を増やす必要を主張する点に対し、解釈的アプローチに基づく単一のコミュニティや組織を対象としたフィールド調査では、長期間にわたる持続的な観察において、しばしば調査地内のさまざまな場所での観察、長時間にわたるインタビュー、政府機関や政策、その他の文書の精読や分析において、大量のデータポイントを伴っている。例えば、社会学者の Rosabeth Moss Kanter は、120 日以上の「現場での個人的接触日」を過ごし、その間に対話者と 120 以上の「瞬間的会話」を行なった。ここでは、数えきれないほどの観察時間と「瞬間的会話」のすべてが、研究に貢献したことが含意されている。ある意味ではこれらの一つひとつが「観察」であると言えるが、それは必ずしも定量分析で使われるような用語ではない。
- ・ 解釈的アプローチにおいて「データ」とは、フィールドから切り離された「収集」のための素材ではなく、研究者の観察と、フィールドにおける観察対象との相互作用を通して、共同生産されるものとみなされる。

➤ 解釈的分析手法の多様性(xxi-xxv)

本節では、上記の解釈的アプローチの定義と特徴を踏まえ、その多様性について図表とともに確認する。

- 言葉やその他のデータに関する解釈的研究には幅広い方法が存在するが、解釈的研究コミュニティ以外ではあまり知られていないものもある。図表 1.1 は、「無限」の多様性を持つ解釈アプローチを部分的にリスト化したものである(このリストは決して完

思考」には演繹と帰納の二つが挙げられる。しかし、論理学・科学哲学者チャールズ・パースは二つの「思考」に対し、上述の「アブダクション(abduction)」もしくは「リトロダクション(reproduction)」と呼ばれる別の「思考」が存在することを指摘した。

全ではないことを強調したい)。

- リストに示されている多様性は、解釈学的研究のすべてがその哲学的・手続き的問題 (philosophical and procedural issue) について、全員が一様に語っているわけではない、という事実を示している。
 - 図表 I-1(次頁)に挙げた分析手法を見ると、記述的研究からより明確に批判理論的研究 (後者は個人の意味づけに対する制度的構造や権力の影響に関心がより焦点化されている) へと連続的に配列することができるかもしれない。
 - ◇ 例えば、ケーススタディ、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ライフヒストリー、オーラルヒストリー、参与観察などは、一般的に記述的な分析として、アクションリサーチ、批判理論、脱構築、言説分析、ポスト構造分析は記述的分析の対極に、フレーム分析や価値批判分析は両者の中央部に、という配列である。
 - ◇ しかし、あらゆる種類の解釈的研究が暗黙の知識(tacit knowledge)を明示し、沈黙していた言説を語らせ、それによって権力の問題に必然的に関わることになるという点に注目すれば、上記の区分並びに配列は不適切であることがわかる。敷衍すると、どのような解釈的アプローチも記述的-批判理論的研究の連続体を横断する能力を有していると言える。
 - ✓ 例えば、批判的言説分析を用いる研究者は、組織、政府、法律、その他のテキストを精読する際、特定の思想家を対象とした政治思想研究や、政治理論研究における解釈や説明の様式を用いることがある。逆に、政治・社会理論研究を行う研究者が、インタビューデータ、日記、絵画、記録資料等、解釈的実証主義において活用される方法論を用いてエビデンスを生成することもある。

Table I-1

Varieties of Interpretive Research Methods

Action research/Participatory action research
Case study analysis¹
Category analysis
(Social) Constructionist/constructivist analysis
Content analysis^{1, 2}
Conversational analysis
Critical legal studies
Critical race theory³
Critical theoretical analysis
Deconstruction
Discourse analysis
Dramaturgical analysis
Ethnography¹
Ethnomethodology
Feminist analysis
Field research¹
Frame (-reflective) analysis
Genealogy
Grounded theory^{1, 4}
Hermeneutics
(Cultural) History^{1, 5}
Life history
Metaphor analysis
Myth analysis
Narrative analysis
Oral history
Participant-observation¹
Phenomenological research⁶
Poststructural analysis
Science studies (sociology of scientific knowledge; science and technology studies)
Semiotics
Space analysis
Storytelling analysis
Symbolic interaction
Textual analyses (of various sorts)
Value-critical analysis
Visual analyses (e.g., of photographs, paintings, organizational films, including those produced by situational members)¹

¹Note that this approach may be used in keeping with either interpretive or positivist presuppositions.

²This refers to word-based content analysis, not incidence rate counts.

³On critical race theory, see Lynn et al. (2002).

⁴In the spirit of Anselm Strauss (e.g., Strauss and Corbin 1990; see Strübing 2007).

⁵For examples, see Darnton (1984, 2003), Davis (1983), and the chapters in this book by Robert Adcock, Douglas C. Dow, and Ido Oren.

⁶Meaning empirical, not theoretical or philosophical, research.

➤ 結論

- 本稿では、「解釈的アプローチ」に関する関心の高まりと、その手法に関する議論状況を「定性的」、「定量的」研究の区分とともに整理し、本書全体の検討課題を提示している。

- 本稿の後半部では解釈的アプローチの定義と特徴を確認した上で、その多様性についてリスト化を行なっている。

➤ 参考文献

- 西岡晋, 2011, 「政策過程論の『構成主義的転回』」『金沢法学』53 卷(2): 97-140 頁.
- 田中愛治, 2003, 「第 19 章 投票行動」久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真淵勝, 2003, 『政治学 Political Science: Scope and Theory』有斐閣. 381-393 頁
- 米盛裕二, 2007, 『アブダクション 仮説と発見の論理』勁草書房.